
人類の時間

blurd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類の時間

【Nコード】

N7744R

【作者名】

blurd

【あらすじ】

時間を動かしている張本人。それは○○だ。

「アースが消えた!？」

ホログラム映像が飛びかうなか局長は副局長の報告を聞きは振りかえる。そのとたんもう一度、見ていたホログラム映像に目をむけ「どうということだ？」と声をもらす。

「だからアースがいらないんです。宇宙界のどこにも!これでは地球の時間が・・・」と副局長は身振り手振りで説明するが局長は副局長に見向きもしない。

その様子を感じ取り副局長も「局長？」と声をもらした。「どうしたのです・・・」副局長がそこまで言いかけたとき「これを見てもろ」という局長の声がとんだ。

副局長は局長の言うとおりホログラム映像をみる。そのとたん彼は言葉を失う。

二人はただ呆然とそのホログラム映像を見続けることしかできなかった。

秘城^{ひしろ} 聖夜^{せいや}

僕、沖荒^{おきあら} 夢滝^{むたき}が彼の事で知っているのはその名字と名前だけだった。

いや、おそろく(というか絶対に)クラス全員が、そうだろう。

彼、秘城 聖夜が、ここ桜崎第二小学校に転校してきたのは、いまからちょうど二週間前だった。六年生として初めての始業式、つまり一学期の始業式だった。

もともと冷静で冷めている奴だったけど自己紹介は、もっと冷めていた。

「今日からお世話になります。よろしくおねがいます」の一言だった。

「お世話になります」なんて居候するわけでもないのに。

それがどうゆうわけだか僕のクラス六年二組になってしまった。

ちなみに桜崎第二小学校は四組まである。

確率は四分の一なのに、まさかその四分の一が僕のクラスだったなんて。

そうゆうわけで僕のクラスになった秘城 聖夜。その秘城 聖夜をだいたいのクラスの子は、無視していた。

ひどいと思う？一人の子を無視するなんて。ちがうちがう。

ひどいのは、あっち。聖夜くんのほうさ。

僕のクラス、六年二組で一番元気な男の子で、いつも誰かに話しかけているんだけど、みごとに無視された。

そのときの落ち込みようだったらなかったな。

そのほかにもたくさんの子が声をかけたけど、すべて無視。いちども声を返さなかった。

だからさ。みんな無視してるのは。

話かけたって一度も声を返さない。

そんな聖夜くんに興味をもったのが僕。

僕は冷静で冷めていて話を無視する聖夜くんに、ものすごく興味をもった。

それから僕の尾行作戦がはじまった。

尾行といっても、そう簡単にはいかなかった。

彼が転校して二週間後の休み時間、ボクは聖夜くんの尾行を開始した。

聖夜くんは教室を出ると南校舎の方向にまがった。南校舎といえは図書室がある校舎だ。

しかし、いつもそこでボクの尾行は失敗する。かならず曲がり角にいくと見失ってしまうのだ。

何度も何度も失敗に終わり、ボクは、ばからしくなってきた。
そこでボクの秘城聖夜の興味はつきた。

その興味がもどってきたのは終業式の後だった。

聖夜くんはその日、終業式に出席しなかった。

まあ、彼はほとんどの行事に参加しなかったから珍しくなかったけど、その日違ったのは、聖夜くんが行方不明になっていたこと。
学校中大騒ぎだった。

終業式が終わった後、ぼくは南校舎にある図書室に向かった。

とくに、これといった理由はなかったけれど、なぜだか行きたくなかった。

ボクは早歩きで図書室に行き静かにドアを開けた。

「……え？」

そこには聖夜くんがいた。かすかに笑いながらこっちを見て。

「なんで……なんでこんなところに居んの。行方不明だったはずじゃ……」

聖夜くんはボクに背を向けかすかに聞こえる声でつぶやいた。

「おまえこそ……なんのようだ。ずっと俺のこと追いかけてまわしてただろ」

「えっ!？」

ばっ、ばれてた!!

「え、えっと。それは……」

「まあ、いいや。どうせそうなることだと思ってたしな」

「??。そうなることだと思ってた? どうゆうことだ?

「どうゆうこと? 思ってたって」

聖夜くんはまた、かすかに笑いながらこっち見た。

「おしえてやるよ。俺のことも……世界のことも。あと、めんどくさいからツツコムな」

「??? 再びはてなマーク。しかも一つ増えてるし。」

「まず……世界というのは「時間」「空間」「次元」でできている」

やばい……ツツコミたい……

「まずは次元。パラレルワールドというのはしっているだろ。同じ世界に複数の地球があるというの。それと同じだ」

いや、それと同じって言われてもよくわかんないし。

「次に空間。空間は地球の内側にある場所、物質、そして生命のことをいう」

生命のことって……ボク達も空間の一部ってこと!?

「そして問題なのが時間だ」

問題なのがって……時間だけ特別ってことかな……

「時間というのは次元、空間とは別で動いている物。流れていくものなんだ。もしも時間がなくなれば生命は活動を止め、死の星となる。そうさせないために神がいる」

「神!？」

やばい。つつこんじゃった。でも神はないだろ神は。

「時間を流れさせ、生命を守る。それが神の仕事。そしてこの星の時間も一人の神が動かしている。そしてその神の寿命がもうそろそろ近付いてきている」

そこまで聞いたとき聖夜くん疑問を覚えた。それは神やら時間やらとはまったく関係ないこと。

「ねえ……君の左手が……すこしばやけてるんだけど」

そう、なぜか聖夜くんの左手がぼんやりしている。まるで、そのまま消えさるように。

「ああ……もうそろそろだな……」

もうそろそろ。その言葉を聞いた時、ある思考がよぎってしまった。それが、確信へと変わる。ボクはおそろおそろ聖夜くんになぜねてみた。

「もしかして……もしかして地球の神は君なの? 聖夜くん……」
ぜったいにそうだ。こんなに神のことなどを知っている聖夜くんは。

「そう。俺が地球の神だ」

そのとき時間が止まった。

「……アースの活動が完全に停止しました」

副局長は画面をみながら静かに言った。

局長は「そうか……やはりな。神が星に近づくなどあるはずがないからな。それをできたのはアースの活動が完全に停止するから……か」とつぶやいた。

「私たちは非常に有力な神を失ってしまったということですね」

「ああ、そうゆうことだ」

局長がそこまで言った時、副局長が思いだしたように声をあげた。
「それより、地球の新しい神……アースはどうします？このままだと地球の時間が止まったままですけど」

「ああ。それは君に任せるよ。有力なのを選抜してくれ」

「わかりました。あと……人類はどうします？」

副局長の質問に局長は少し考えてから言った。

「すべて消してしまっている。あれは地球の生態系には必要ない。」
副局長は「わかりました。では……」といって部屋を出て行った。

こうして再び地球には時間が流れだした。

しかし、そこには、かつては居た、あの人類の姿はどこにも見当たらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7744r/>

人類の時間

2011年8月27日03時26分発行